

芥川龍之介の断定修辞「…に違ひなかつた」の外国語訳

西野, 常夫
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/16010>

出版情報 : Comparatio. 5, pp.82-90, 2001-03-20. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



芥川龍之介の断定修辭「…に違ひなかつた」の外国語訳（注1）

西野常夫

文学作品の翻訳の具体的検討においてしばしば話題となるのは、ある国や文化圏に特有の事物や文化現象の記述をどのように外国語に翻訳すべきか、という問題である。たとえばロシアの小説によくでてくるサモワールという湯沸し器を和訳する場合、そのまま「サモワール」と片仮名に音訳しておいて、頁に余裕があればその形状、使い方などを注記するという方法が考えられよう。それからまた、たとえロシア的異国情緒が消え去ってしまおうとも、たんに「湯沸し器」というふうに和風化してすましてしまう方法もありえるだろう。日本の小説の外国語訳の例でいえば、「白足袋」を“white gloves”（白手袋）に英訳するというのもその類である（注2）。

このような、いわば作家の外側の現象の翻訳に対して、作家個人の文体の癖、特異な文体というような作家の内側からでてくるものの翻訳も検討の対象としてとりあげる価値はあるだろう。ところで、ことさら文体というような言い方をするからには、その作家のことばの使い方がふつうの使い方と比べて特徴的なものであることが前提とされる。それがなんであれ、なにかをありのままに外国語に移植するなどということはもともと無理な話であるから、こと文体の翻訳を問題とする場合は、なおさら、素材としてとりあげる文体はそれ相当に特徴的なもので、かつ一貫した傾向をもつものであることが望ましい。翻訳という加工をへれば跡形もなく消失してしまわざるをえない程度の偶然的、散発的特徴では、かりにそれが訳文に反映していない場合、訳者のたんなる見落としなのか、意識的な削除なのか、判断しにくいからである。そういう意味で、文体に非常に意識的であった芥川の作品は文体の翻訳論に格好の素材を提供すると考えられる。そこで本稿では芥川の晩年の自伝的作品「齒車」と「或阿呆の一生」における「…に違ひなかつた」の英仏訳および、芥川の翻訳では世界でもっとも盛んなロシア語訳の検討も加えて、文体翻訳論のひとつの試みとしたい（注3）。

言語学者小林英夫の指摘にもあるように、断定もしくは推測を表す「…に違ひなかつた」は晩年の自伝的小説に多用される（注4）。あたかもある現象の生起があらかじめ決定されていることを示唆するようなこの表現は芥川の宿命論的世界観を色濃く反映したものであり、精神的危機に陥った晩年の作家が自分の生涯を運命に翻弄されたものとして悲劇的にまた暗鬱に描こうとしている自伝的作品に頻用されるのはうべなるかなと思われる。やや大げさになるが、文は人なり、の言葉のとおり、個性的文体は作家のそれなりののっぴきならない内的根拠に裏打ちされているという立場をとるならば、文末の一見瑣末な「…に違ひなかつた」の訳出に留意するか否かは、翻訳者の芥川理解の試金石になるのではないかとさえ思われる。しかしいずれの言語もその言語特有の構文や言いまわしに条件づけられ、また制限されているので、翻訳者のいかな深慮も必ずしも訳文に明瞭に反映されないというのが現実である。このような微妙な事情も念頭に置きながら論を進めたいと思う。

語り手が地の文で素朴な読者に向かって「…に違ひなかつた」と断言する時は、その断定の根拠が明示もしくは暗示される、あるいは読者にとって自明であるという条件が満たされるのがふつうである。次の例「…に違ひありません」は現在形であるため、「…に違ひなかつた」と比べて、出来事と語り手の時間的距離感が縮まるが、その点を除いては、やはり語り手の推測・断定を示すことにはかわりはない（注5）。

（例1）が、さういふ中にも、罪人たちは何百となく何千となく、まつ暗な血の池の底から、うようよと這ひ上つて、細く光つてゐる蜘蛛の糸を、一列になりながら、せつせとのぼつて参ります。 今の中にどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまふの

に違ひありません。(「蜘蛛の糸」、「芥川龍之介全集第3巻」岩波書店、1996年、212頁)

(英訳) If he did not do something quickly, the thread was sure to break in two and fall.

(*R. Autagawa's Tales Grotesque and Curious*, tr. by Glenn W. Shaw, Second edition, The Hokuseidô Press, 1938, p.72)

(直訳) もし彼が早くどうにかしないと、きっと糸は二つに切れて、(糸は)落ちてしまうところだった。

(仏訳) Il fallait les arrêter d'une manière ou d'une autre, avant qu'il ne fût trop tard; sinon, le fil finirait par se rompre. (*Rashômon et autres contes*, tr. par Arimasa Mori, Gallimard, 1965, p.135)

(直訳) 手遅れにならないうちに彼ら(罪人たち)をなんとか止めなければならなかった。さもなければ、糸は最後には切れてしまうところだ。

(露訳) Надо что-то скорей предпринять, или паутинка непременно порвется и он полетит в бездну. (*Паутинка*, перевод В.Марковой, в: *Сочинения в четырех томах, т.1*, Полярис, 1998, с.340)

(直訳) 早く何か手を打たなければならない。さもなければ、蜘蛛の糸はきっと切れて、彼は深淵に落ちるだろう。

「自分一人でさへ断れそうな、この細い蜘蛛の糸」に大勢の罪人がぶら下がれば、蜘蛛の糸が切れることはもつともなことであるから、「糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまふのに違ひありません」という語り手の断定は説得力がある。このように推論の筋道が明瞭な場合、読者は語り手の言い分を信頼する。

ところがこの条件を満たさずに「…に違いない」あるいは「…に違いなかった」を乱発するいいかげんな語り手あるいは作者は、いずれ読者から信用されなくなるだろう。例外があるとすれば、それはなんらかの理由によって、読者がその語り手あるいは作者に、そのいいかげんさに対する反発を凌駕するだけの魅力を感じる場合である。筆者はまさに、「…に違いなかった」を乱発する晩年の芥川の文体に魅力を感じる者であるが、それは「…に違いなかった」を多用せざるをえないほどまでに宿命に追い詰められた人間の姿に心を動かされるからである。

芥川は晩年の作品において、断定や推測の根拠が読者に不明瞭なままに、「…に違いなかった」を頻用する。断定の根拠は語り手の心の中に秘められたままであるから、読者は叙述の流れの中に断定の根拠を認めて、語り手の断定に納得し同意するというふつうの読書の手順をふむことはできず、語り手の一方的な主張に唯々諾々と従うしかない。これを小林英夫は芥川の「他人に指一本指させないとする自信の強さ」のあらわれであるとし(注6)、寺田透は芥川の「精神の虚栄」のあらわれであるとする(注7)。これに対して、常岡論文は、芥川の「…に違いなかった」は「多分…だろう」程度の弱い推定の意味に解釈した方がいいのではないかとし、これらの日本語語尾にみられる不明瞭なニュアンスを翻訳する困難さを勘案した場合、仏訳が“peut-être”, “sans doute”などで処理してすましているのも致し方ないと結論づけているようである(注8)。

筆者は少し別の観点からこの問題を考える。すなわち、多くの場合、文章の前後に断定の根拠が示されないで使用される「…に違いなかった」の根拠を語り手は彼を導く運命の声からあらかじめ聞いているのだと感じられる。運命の絶対的な力を信じる語り手は運命の差し出す判断あるいは決定をうやうやしく受取り、あらかじめそれに同意しているわけであるが、「…に違いなかった」と語る段になって、今一度、自分に言い聞かせるように、あるいは言いふくめるようにしながら、読者に伝えているようである。「運命はかように判断し決定した。そして、なるほど、それはそのとおりに違いない。運命の指し示すとおりののであった」と。「…に違いなかった」と断言する語り手の陳述を読む時に読者がいだけく奇妙な印象、すなわち、根拠らしきものもないのにどうしてそのように強く言い切れるのかという疑

間、なにか根拠があるとしてもそれが読者に隠されたままに話が運んでいるのではないかという不審、あるいは、語り手は読者に訴えかけるようであり、実はひとりごちているだけではないかという読者が感じる疎外感などはすべて、語り手とその運命の秘密の結託が原因になっているのである。芥川の語り手にとって運命の存在はかほどに現実的なもので、断定を押しつけられているのは、読者ではなくて、むしろ語り手の方であるといってもよい。芥川の「…に違いなかった」という陳述の様相から想像される語り手の意識や心理の動きはこのようなものである（注9）。このような神秘主義的な解釈を使わずするほど、芥川の「…に違いなかった」はふつうの日本語の使い方とかけ離れている。

以下、そのような語り手と運命の結託のからくりを背後に色濃くにじませた特徴的な用例から、逆に比較的常套的な修辞まで、濃淡織り交ぜながら例示し、その訳文と比較してみたい。

（例2）僕は或知り人の結婚披露式につらなる為に鞆を一つ下げたまま、東海道の或停車場へその奥の避暑地から自動車を飛ばした。自動車の走る道の両がはは大抵松ばかり茂つてゐた。上り列車に間に合ふかどうかは可也怪しいのに違ひなかつた。

（「全集第15巻」岩波書店、1997年、40頁）

（英訳 A）Whether we could catch the Tokyo-bound train was rather problematical. (p.31)

（直訳）私たちが東京行きの列車に間に合うかどうかはかなりあやしかった。

（英訳 B）It was rather doubtful about making the Tokyo-bound train in time. (p.45)

（直訳）東京行きの列車に間に合うかはかなり疑問だった。

（仏訳）Mes chances d'attraper le train de Tôkyô étaient à vrai dire fort minces. (p.119)

（直訳）東京行きの列車に間に合う私の可能性は実をいうとはなはだ小さかった。

（露訳）Что мы успеем на поезд в Токио, было довольно сомнительно. (с.375)

（直訳）私たちが東京行きの列車に間に合うことは、かなり疑わしかった。

「歯車」の「一 レエン・コウト」の冒頭部に出てくるこの文章において、語り手の乗る自動車が列車の発車に間に合うかどうかを、読者は判断することができない。現在の時刻も列車の発車時刻も、駅までの距離等についてもまったく知らされないからである。「可也怪しいのに違ひなかつた」とは、一読したところでは、いかにも誰かこの叙述の聞き手（読者）に同感の相槌を求めるような思わせぶりの言葉遣いであるが、ここで語り手の真の話相手は読者ではないのではないか。語り手はなにか別の存在に向かって、「なるほど、あなたのおっしゃる通り（お考えになる通り）、列車に間に合うのは疑わしいです」と確認しているふしがある。読者はそれを傍らで聞いているだけなのだ。そして、この別の存在は読者とちがって、列車時刻その他の情報についてすべてお見通しの存在なのである。あるいは、語り手は自分自身に向かってひとりごとを洩らしたただけなのだろうか。「…に違いなかった」という謎めいた表現が惹起する以上のような疑問を英仏露訳者もいだいたかどうか、訳文からは判定しがたいが、「…に違いなかった」のニュアンスはいずれの訳文からも感じられない。おそらく、無理やり訳出すると不自然になるとみて、切り捨てたのではないだろうか。

仏訳の方は à vrai dire 「実をいうと」という表現を使うことによって、語り手が列車時刻等の情報をまったくもたない読者を慮り、とりあえず自分の判断を丁寧に読者に伝達している、かのように訳出している。つまり、この場合、一人称による作品冒頭の語り口として標準的な言葉遣いを採用したのである。その他の3種の訳は実質的には仏訳から「実をいうと」を抜き取ったものであり、語り手は仏訳におけるよりもより淡々と自分の判断を述べていることになる。語り手のおこなう状況説明としてなんの変哲もない素直な叙述に化しているのである。このように、英仏露訳はいずれも日本語原文にみられるある種のぎこちなさを払拭したわけであるが、その結果として、その奇妙に個性的な言葉遣いからただよってくる語り手の宿命論的諦念の匂いを雲散霧消させてしまっているのである。

次の例は、「T 君」が語り手に話しかける場面である。

(例 3) 「あすこに女が一人ゐるだろう？ 鼠色の毛糸のシヨオルをした、…」

「あの西洋髪に結った女か？」

「うん、風呂敷包みを抱へてゐる女さ。あいつはこの夏は軽井沢にゐたよ。ちよつと洒落れた洋装などをしてね。」

しかし彼女は誰の目にも見すばらしいなりをしてゐるのに違ひなかつた。

(「齒車」、「一 レエン・コオト」、上掲書、44 頁)

(英訳 A) But her plainness was all too obvious.(p.33)

(直訳) しかし彼女が地味なのは明白すぎるほどだった。

(英訳 B) She certainly looked shabby now to anyone.(p.48)

(直訳) 今は彼女は確かに誰の目にも見すばらしく見えた。

(仏訳) La femme était pourtant, sans conteste, on ne pouvait plus misérablement vêtue. (p.122)

(直訳) その女はしかしながら、異論の余地なく、これ以上無理なほど見すばらしいなりをしていた。

(露訳) Однако теперь, на чей угодно взгляд, она была одета бедно.(с.377)

(直訳) しかし今は、誰の目にも、彼女は見すばらしいなりをしていた。

原文日本語は、「誰でも、もし彼女を見たら、彼女の服装はみすばらしいと思うに違いないだろう」の意味であると単純に解釈してすましておきたいが、やはり「に違ひなかつた」が余分であるという気がする。英仏訳では語り手の強い自信の口調が all too, certainly, sans conteste に意識的に訳出されている。

露訳は「…に違ひなかつた」を無視し、平易な訳出に徹している分、芥川の文体の個性は消えた。

(例 4) しかし昼間は晴れてゐた空もいつかもうすつかり雲つてゐた。僕は突然何ものかの僕に敵を持つてゐるのを感じ、電車線路の向うにある或カフエへ避難することにした。

それは「避難」に違ひなかつた。

(「齒車」、「三 夜」、上掲書、59 頁)

(英訳 A) No doubt, it was a haven.(p.41) (直訳) 疑いなく、それは避難所だった。

(英訳 B) “Asylum” was precisely what it was.(p.60) (直訳) 「避難」というのがまさにあてはまった。

(仏訳) «Me réfugier», il n'y avait pas d'autre mot.(p.133) (直訳) 「避難する」としかいいようがなかつた。

(露訳) Это действительно было «убежище» (с.387) (直訳) それは実際、「避難」だった。

このような繰り返しの文で使われる「…に違ひなかつた」ならば、違和感なく読むことができる。晩年の芥川において数少ない納得できる用法のひとつであるといえる。それゆえ、英仏露訳ともに「…に違ひなかつた」にこめられた強意を出そうと素直に努めた訳しぶりである。日本語原文で「避難…」が2度繰り返されるが、1度目の「避難…」が読者にまず情報を与えるためのものであり、2度目の「避難…」が読者に念を押し、また強調する機能をもつ繰り返しであることはあきらかであり、そのことを読者にはっきり伝えるために、訳文で強意表現を補足する工夫が必要だったのである。それは英訳では「疑いなく」や「まさに」という副詞、仏訳では「…としかいいようがなかつた」という構文、露訳では「実際」という副詞の使用である。しかし、この文の少し先に出てくる例はまたもや根拠なしの「…に違ひなかつた」である。

(例 5) 彼は僕の部屋へ来ると、鏡を後ろにして腰をおろした。それからいろいろのことを話した。

いろいろのことを？—— しかし大抵は女の話だった。僕は罪を犯した為に地獄に墮ちた一人に違ひなかつた。が、それだけに悪徳の話は愈僕を憂鬱にした。

(「齒車」、「三 夜」、上掲書、62 頁)

(英訳 A) Undoubtedly I was one of those sinners fallen into hell. For this very reason I became all the more

depressed.(p.42)

(直訳) 疑いなく僕は地獄に落ちた罪人たちの一人だった。まさにそれゆえ僕は愈憂鬱になった。

(英訳 B) I was undoubtedly one of those condemned to hell because of the sins I had committed. So the tales of vice made me all the gloomier.(p.62)

(直訳) 僕は疑いなく犯した罪の為に地獄落ちを運命づけられた者たちの一人だった。それゆえ、悪徳の話は僕を愈憂鬱にした。

(仏訳) Je faisait certainement partie de ceux que leurs crimes avaient menés en enfer. N'empêche que la perversion dont témoignaient ses histoires finit par me plonger dans une humeur noire. (p.135)

(直訳) 僕はなるほど(確かに)自分たちの罪によって地獄につれていかれた者たちの一人だった。それにもかかわらず、彼の話が物語る墮落はついに僕を憂鬱の気分にした。

(露訳) Конечно, я был одним из тех, кто за совершенные преступления попал в ад. Поэтому флиртующие разговоры все более наводили на меня тоску.(с.388)

(直訳) もちろん、僕はおかした罪の為に地獄に墮ちた者たちの一人だった。それゆえ、いかがわしい会話は僕に憂鬱の気分を起こさせた。

芥川の根拠なしの「…に違いなかった」が翻訳を惑わせる格好の例である。仏訳と英露訳の本質的なちがいは日本語原文中の2文を逆接関係と順接関係のいずれに解釈するかに基づく。原文の意図は順接にあるのではないか。つまり、「罪を負っているからこそ、他人の罪の話を聞くとますます憂鬱になる」、というのであって、「罪を負っているけれども、他人の罪の話をきくと憂鬱になる」というのではない。仏訳は「が、それだけに」という2文のつながりの句において、逆接の「が」を重視しすぎ、また順接の「それだけに」を無視したために、「…に違いなかった。が、それだけに」の部分で“certes A mais (n'empêche) B”「なるほど、Aではあるが、しかしBだ」の慣用型に安易にはめこんでしまったのではないか。原文において、「が」の意味、役割も不明瞭であるが、躓きの石は、読み手に根拠不明のままでいきなり使用される断定修辭「…に違いなかった」なのではないだろうか。

(例6) 凝灰岩の窓の外はいつか冷えびえと明けかかつてゐた。僕は丁度戸の前に佇み、誰もゐない部屋の中を眺めまはした。すると向うの窓硝子は斑らに外気に曇った上に小さい風景を現してゐた。それは黄ばんだ松林の向うに海のある風景に違ひなかつた。僕は怯々窓の前へ近づき、この風景を造つてゐるものは実は庭の枯芝や池だつたことを発見した。

(「歯車」、「五 赤光」、上掲書 78 頁)

(英訳 A) Outside the limestone window the chilly dawn had arrived. I stood before the door, surveying the empty room. Over the windowpane, foggy in spots due to the outside air, a small landscape appeared — a view of the sea beyond the yellowed pine grove. When I approached the window feafully I found out that the view was really caused by the withered grass and pond in the garden. (p.50)

(下線部直訳) 外気で斑に曇った窓ガラスの向こうに小さな風景——黄色い松林の向こうの海の風景が現われた。僕は怯々窓に近づき、その風景は実際は庭の枯れ芝と池がつくったものであるのを発見した。

(英訳 B) Outside the tufa window day was about to break shiveringly. I stood at the door and looked around the empty room. In the windowpane I noticed a small scene of the sea beyond a yellowish pine wood. I went to the window with some timidity, to see what had evoked the picture was the withered grass and pool in the garden.(p.75)

(下線部直訳) 窓ガラスの中に僕は黄ばんだ松林の向こうに海のある小さな光景を見た。僕はやや怯々

怯ずと窓のところに行き、その光景と思わせたものは庭の枯れ芝と池であるのを見た。

(仏訳) La lumière glacée du petit jour pointait déjà à la fenêtre encadrée de tuf. Debout contre la porte, je regardait la chambre vide quand soudain mes yeux s'arrêtèrent sur la fenêtre en face de moi : un paysage en miniature se dessinait sur la vitre marbrée de buée par le froid du dehors — celui de la mer étale par-delà une forêt de pins tout jaunis. Je m'approchai le coeur battant : ce paysage n'était autre que l'oeuvre de l'étang et de la pelouse flétrie du jardin.(p.146)

(下線部直訳) ふと僕の視線は目の前の窓の上に止まった。小さなひとつの風景が外の寒さで斑に曇ったガラスの上に見えた。その海の風景はすっかり黄色くなった松林をかなたに繰り広げている。僕はどきどきしながら近づいた。その風景は庭の池と枯れ芝のつくったものに他ならなかった。

(露訳) За окном начинался холодный рассвет. Я стал прямо перед дверью и огляделся пустую комнату. И вот на оконном стекле на узорах осевшего инея появился крошечный пейзаж. За пожелтевшим сосновым лесом лежало море. Я боязливо подошел к окну и увидел, что на самом деле этот пейзаж образован высохшим газоном и прудом в саду. (с.398)

(下線部直訳) すると、窓ガラスに張った霜の模様の上に小さな風景が現われた。黄ばんだ松林の向こうに海が横たわっていた。僕は怯ず怯ず窓に近づき、実際はその風景は庭の枯れ芝と池によってつくられたものであるのに気づいた。

この日本語原文中の「…に違いなかった」は「…に違いないと思った」の意味であるので、この言い回しを使ったのは根拠なしとしない。語り手は最初、「窓硝子の向こうには海があるに違いない」、と錯覚したのである。「違いなかった」ではなく、「違いないと思った」と書けば、錯覚であったことがもっと明瞭に読者に伝わる場所である。そして英仏露訳者もぬかりなく、たとえば、「それは、疑いなく、海の風景だった(と思われた)」というぐあいに、語り手の断定(結局は錯覚なのだが)を訳出する工夫をほどこしたのではないだろうか。断定表現を欠くと、事実の淡々とした描写となり、却って、もはやその事実は変更しにくくなる。訳文において、「疑いなく」というような人間的な表現を使うことによって、陳述内容が無謬の語り手による絶対的な命題ではなく、ひとりの登場人物でもある語り手の主観的判断であるにすぎないことを示せば、次の錯覚の発見へと続く文脈の流れがもっとなめらかになったはずである。さらに言えば、「疑いなく」というような断定表現によって、この語り手の自己過信癖、妄想癖を暗示し、ひいては、語り手のおかれた尋常でない状況を読者に実感させる効果もあったはずである。芥川は一見なにげない文末修辭を駆使することによって、語り手の精神的危機の状況を暗示するにふさわしい文体をあみだしている。英仏露訳者はいずれも文脈は正しく理解しているだけに、今一步踏みこんだ訳ができなかったのだろうかと思われる。日本語原文では、「に違いなかった」の箇所では読者は早くも、語り手の錯覚の可能性を予想し、また、後続の文章で錯覚の発覚が述べられるだろうことを予想する。他方、平坦な英仏露訳の読者は日本語読者より一步遅れて、急転直下、語り手の錯覚の事実を突きつけられて驚くのである。それはそれで別の面白味があるかもしれないが、作家の真意はおそらくそこにはない。

(例7) 彼はその死体を眺めてみた。それは彼には或短編を、——王朝時代に背景を求めた或短編を仕上げる為に必要だったのに違ひなかった。

(「或阿呆の一生」、「九 死体」、「全集第16巻」岩波書店、1997年、43-44頁)

(英訳) For a short story of his,—— no doubt, to authenticate atmosphere for a tale of dynastic times he looked on.(p.93) (直訳) 疑いなく (中略) 自分のある短編のために眺めていた。

(仏訳) Il en avait besoin pour terminer un récit—— (…)(p.162)

(直訳) 彼は或短編を仕上げる為にそれを必要とした。

(露訳) Это ему нужно было для новеллы —— (…)(c.415)

(直訳) それは短編の為に彼に必要だった。

仏露訳とも「…に違いなかった」の部分は訳出を放棄している。小説家が短編に使うために死体を眺める、というのは至極理解できる。そういう意味では、この断定は根拠なしとしない。しかし、なぜ、そこで「…に違いなかった」と、死体を眺める行為をなにか大変な必然性のもとになされた行為であるかのようには詠嘆調に語るのかを理解するのはやさしいことではない。「必要だった」と「必要だったのに違いなかった」を比較した場合、前者には事実を叙述する淡々とした語り手の筆があるのみであるが、前者には宿命のためにある行動を余儀なくされる「彼」に対する、語り手の同情のまなざしが感じられる。仏露訳者には文末をいちいち捕らえてこのようなうがった解釈をする余裕はなかったかもしれない。英訳者は事情をよく理解したのか、no doubt で忠実に訳出している。

(例8) 彼はひとり寝てゐるのを幸ひ、窓格子に帯をかけて縊死しようとした。が、帯に頸を入れて見ると、俄かに死を恐れ出した。それは何も死ぬ刹那の苦しみ^の為に恐れたのではなかった。彼は二度目には懐中時計を持ち、試みに縊死を計ることにした。するとちよつと苦しかった後、何も彼もぼんやりなりはじめた。そこを一度通り越しさへすれば、死にはひつてしまふのに違ひなかった。 (「或阿呆の一生」、「四十四 死」、上掲書 62 頁)

(英訳) If he could just cross over, he would enter death.(p.128)

(直訳) もしちょっとでも通り越せば、彼は死にはいるだろう。

(仏訳) Passé ce cap, c'était probablement le glissement vers la mort.(p.175)

(直訳) その峠を越せば、おそらく死の方へ滑り込むのだった。

(露訳) Если бы только перешагнуть через него, он, несомненно, вошел бы в смерть.(c.425)

(直訳) もし、それを越えさえすれば、彼は、疑いなく、死に入るところだろう。

この箇所では、死という、誰にとっても等しく未知のものを問題にしているため、かえって、語り手が憶測をたくましくして「…に違いなかった」と断定してしまっても、読者は心情的に反発しないのではないか。「…に違いなかった」の使用が不自然に響くのは、前述したように、読者だけがその根拠を知らされず、一方的に断定を押しつけられる場合である。仏露訳とも、断定の口調は訳出されている(仏訳の probablement は少し弱い感じがするが)。英訳は断定表現をさけ、穏便な訳文ですましている。

結論にかえて

繰り返しになるが、いずれの言語もその言語特有の構文や言いまわしによって条件づけられ、または制限されているので、ある表現が他の言語に翻訳される場合、必ず適当な対応語に訳出されるとは限らない。しかし、ひとまずの結論として、芥川の「…に違いなかった」という独特の修辞も、断定の根拠、またはその修辞の使用根拠が文脈から感じられる場合には英仏露訳ともなんとかそのニュアンスを訳出しようとする傾向にあるといえるのではないか。根拠が不明な場合は訳出を放棄することがある。無理な訳出は読者を混乱させるという配慮からだろう。本稿では議論を進める上でとくに適当な例文だけを分析の俎上にのせたが、「歯車」と「或阿呆の一生」において、「…に違いなかった」の、なんらかの使用根拠が感じられるか否かで区別した使用回数、および、そのニュアンスが訳出されているか否かで区別した回数を示せば次のようになる。このような分類は恣意的になる危険をまぬがれないが、おおよその目安として算出しておく。

「歯車」：根拠が感じられる使用は計5回。うち訳出は英訳 A では2回、英訳 B では4回、仏訳で

は4回、露訳では2回となる。

根拠が感じられない使用は計10回。うち訳出は上記訳文順に4回、5回、4回、5回。

「或阿呆の一生」：根拠が感じられる使用は計2回。うち訳出は英訳では1回、仏訳では2回、露訳では2回となる。根拠が感じられない使用は計5回。うち訳出は上記訳文順に2回、2回、3回となる。

芥川の「…に違いなかった」という断定の根拠の有無の判断は複雑で、読み手の主観に頼らざるをえない場合が多い。しかし、根拠の有無の判定の可能、不可能にかかわらず、この修辞の頻度の高さから語り手の宿命論的決定論を感じる読者は多いだろう。そして、そのことを翻訳者が理解し重視するならば、翻訳言語の制約と折り合いをつけながら、あえてなんらかの断定表現に対応させ、訳出しようとするのではないか、と思うのである。つまり、語り手が宿命論的決定論に憑かれた人物であることを、可能な限り外国の読者に伝えようとするのではないか。そのような訳文はあるいは当該言語の一般的な用法としては奇妙なものにできあがるかもしれない。ちょうど芥川の日本語原文がすでに日本人に奇妙な印象をあたえる特徴的文体でできているように。

いずれにせよ、芥川の語り手の語り口に慣れた読者であれば、使用根拠のとぼしい *certainly* (確かに)、あるいは *nécessairement* (必ず)、*несомненно* (疑いなく) などにいきなり出くわしても、もはや驚かないだろう。それどころか、この作家の個性的な文体にふれる喜びを感じ、さらに、芥川を読み慣れていない他の読者の戸惑いを横目で眺めて優越感さえいただくかもしれない。他方、訳者は読者が早く芥川の文体に慣れてくれることを願っているかもしれない。そうすれば、心おきなく、芥川を直訳調で翻訳できる可能性が少しでも広がるからだ。これは作家の文体が翻訳されるための条件ではないだろうか。

[注]

- (1) 本稿は常岡晃「海外における芥川龍之介の翻訳について (Ⅲ)」、「九州産業大学教養部紀要」第9巻第1号、1972年の発想に依拠して書かれたものである。同論文発表当時まだ出版されていなかった英仏訳などを本稿では新たに加えて検討の材料とした。
- (2) 太宰治「斜陽」の Donald Keene 訳 *The Setting Sun*, Tuttle, 1981, p.24.
- (3) 本稿で検討の材料とする訳本は次の通り。「歯車」については英訳は2種用い、英訳 A : *The cogwheel*, tr. by Beongcheon Yu, "Chicago Review", vol.18, no.2, 1965, pp.31-53、英訳 B : *Cogwheels*, tr. by Cid Corman and Susumu Kamaike, in *Hell screen, Cogwheels, A fool's life*, Eridanos Press, 1987 とする。仏訳は *Engrenage dans La vie d'un idiot et autres nouvelles*, tr. par Edwige de Chavanes, Gallimard, 1987、露訳は *Зубчатые колеса*, перевод Н.Фельдман, в : *Акутагава Рюносукэ, сочинения в четырех томах, т.3*, Полярис, 1998 を用いる。「或阿呆の一生」については、英訳は *A Fool's Life* tr. by Will Petersen, in *Hell screen, Cogwheels, A fool's life*, Eridanos Press, 1987、仏訳は *La vie d'un idiot dans La vie d'un idiot et autres nouvelles*, tr. par Edwige de Chavanes, Gallimard, 1987、露訳は *Жизнь идиота*, перевод Н.Фельдман, в : *Акутагава Рюносукэ, сочинения в четырех томах, т.3*, Полярис, 1998 を用いる。引用の際はそれぞれの訳本での頁数をそえる。「歯車」の英訳2種のうち、B訳は日本人との共訳であることが、場合によっては「…に違いなかった」の断定のニュアンスの訳出においてA訳よりも意識的であることにつながっている可能性があることをここで断っておく。
- (4) 小林英夫「芥川竜之介の筆跡」、「小林英夫著作集 8」みすず書房、1976年、37頁。

- (5) 「歯車」と「或阿呆の一生」の地の文は主人公が身の出来事や回想を過去形で叙述する形をとるため、「…に違いなかった」の現在形「…に違いない」は使用されない。一般に後者は真相が未知の時点での推測の表現である。前者は推測が正しかったことを真相が判明した時点で回顧する場合と、いまだ真相未確認の場合の両方に使用できる。「歯車」と「或阿呆の一生」では真相未確認の「…に違いなかった」だけでなく、「例2」のように真相確認後の回顧的使用と考えられる場合もある（語り手の推測どおり、上り列車には間に合わなかったことが、後述の「次の上り列車を待つ為に停車場のカツフェへはひることにした」〔全集第15巻〕41頁〕という叙述からわかる）。しかし、真相確認済みの「…に違いなかった」の多用ならば不自然ではない、とたたづけられるものではない。本稿にとって重要なのは、真相確認済みの回顧であれ、未確認であれ、この表現にこめられた芥川の宿命的世界観がしからしめる平均的日本語表現からの逸脱である。
- (6) 小林英夫、上掲書、37頁。
- (7) 「芥川龍之介の文体」、「文学その内面と外界」清水弘文堂書房、1970年、270頁。
- (8) 上記、常岡論文、158~162頁。
- (9) 叙述する語り手当人に先立つ判断者が語り手の運命ではなく、世間一般の人々であると思われる例は次のようなものである。「路は山陰に沿うていたから、隊形も今日は特別に、四列側面の行進だった。その草もない薄闇の路に、銃身を並べた一隊の兵が、白襷ばかり灰めかせながら、静かに靴を鳴らして行くのは、悲壮な光景に違ひなかった。」（「將軍」の冒頭）。寺田透はこの文を書く時の芥川の心理状況を次のように想像する。「悲壮な光景だったという代わりに、…に違ひなかったという措辞は、芥川が、それによって、この決死隊発進の光景を単純に悲壮と感ずる人間とは自分が違うことを匂わせるための手つづき、自分がその感じを適切とも紋切り型で愚劣とも自由に判断する能力を具えた人間で、今その感じを分ち持ちながらも、前者のような単純な人間に対して優位と自由を留保する位置に立つものだということを示すためのたくらみのように感ぜられる。」（寺田透、上掲書、268頁）。